2023-6-10

マティスの作品に影響を与えたミューズたち～その４～

山本 雅晴

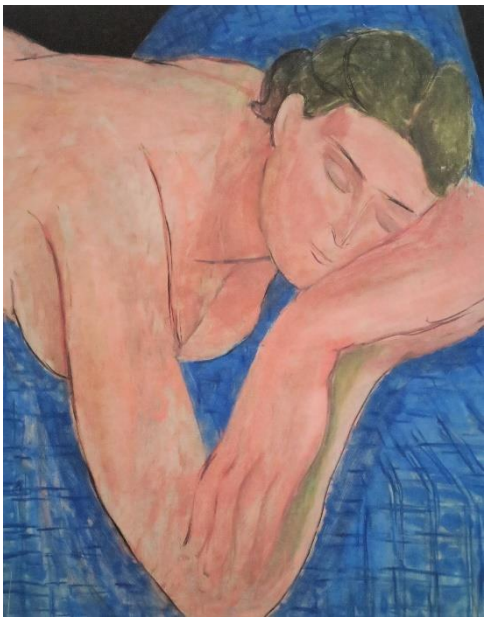
リディア・デレクトルスカヤ（1910 シベリア・トムスク～1998 パリ）は当時シベリア随一の古都トムスクで医師の一人娘として生まれた。1917 年のロシア革命後の 1922 年に両親があいついで疫病で亡くなり孤児となった。主な情報は「マティス 知られざる生涯」ヒラリー・スパーリング著、野中郁子訳 2012 年 白水社刊 に記載されている。しかし、この本はマティスとマティス家から情報提供を受けており、リディア・デレクトルスカヤの正確な情報に欠ける可能性がある。また、1954 年のマティス本人の死後のリディアの記述は全くない。これを補充するような情報を探していたら、「ロシア・ビヨンド・Wikipedia」のカルチャの 2022-2-28 に記述があった。先の情報と異なる点や不確かな記述もあるように思われるが、小生の状況判断や推定をも含めてまとめてみた。

リディア・デレクトルスカヤのキャリア：

・**1910** 年 シベリア・トムスクで生まれる。1 月の平均気温－20℃ ・**1922** 年 裕福な医者の両親と死別。

・**1922～1930** 年？：叔母に育てられ、ハルビン経由でパリに亡命した。パリに着いたときは大恐慌のさなかで、残っていた財産をすべて失い破産同然になった。ソルボンヌ大学に進学して父のように医師になりたいという夢は諦め、かなり年上の男と結婚したが、すぐに破綻した。従姉のエレーヌ・アダン(1903~1985)は 1926 年に国立美術学校に入学し、後に写真家となった。この人がリディアをパリに亡命するように誘った。

・**1930～32？**年の間リディアはハンサムなロシア青年と駆け落ちしていた（パリ→ニース 1932 年）していたが、別れた。その間もリディアはエキストラ、画家のモデル、カジノの踊り子などで日銭を稼ぐしかできなかった。 ・**1932** 年マティスのアトリエ助手として 6 ヶ月間の職を得た。・1935 年初めてマティスのモデルとなる。（下図 1,2）・1939 年まで多数の作品のモデルとなる。（下図 3,4）・1939 年マティスの妻アメリーからマティスとの離婚訴訟で作品や財産の等分配分。リディアの排除や裁判での聴き取りがあった。リディアは解雇されニースの下宿屋で銃による自殺を図るが未遂に終わる。・1939-7-15 マティスはリディアに助手・家事・モデルなどの協力を要請し、ニースのホテル・レジーナのアトリエで精力的に制作に励む。・戦争が激化し 1943～48 はヴァンスに疎開。・1948～54 はニースのホテル・レジーナのアトリエでロザリオ礼拝堂、切り絵に協力。



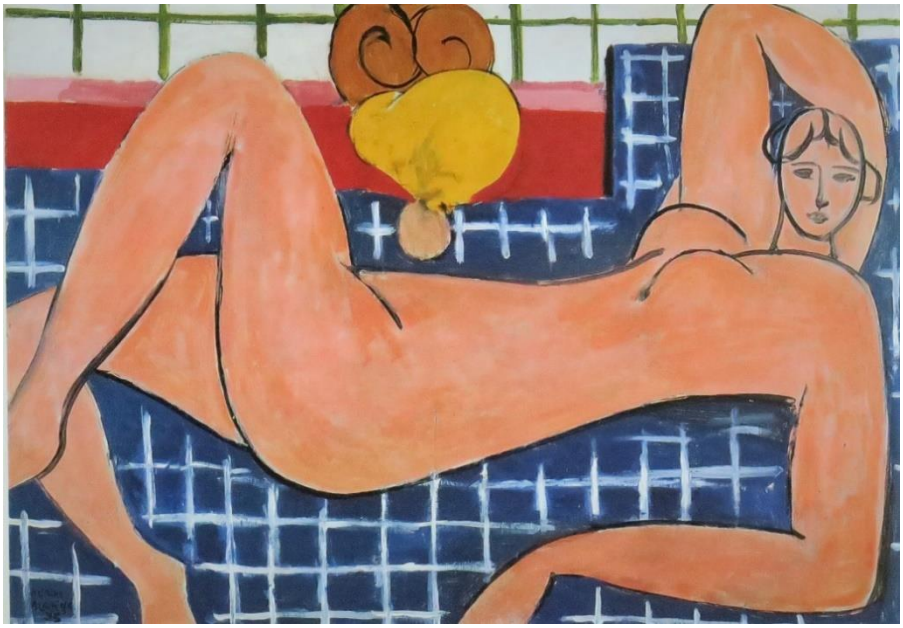
2003 年にリディアからポンピドーに遺贈された。今回の展覧会に出品。

1，夢 1935 年 ポンピドー

2.“夢”のための習作 1935 年

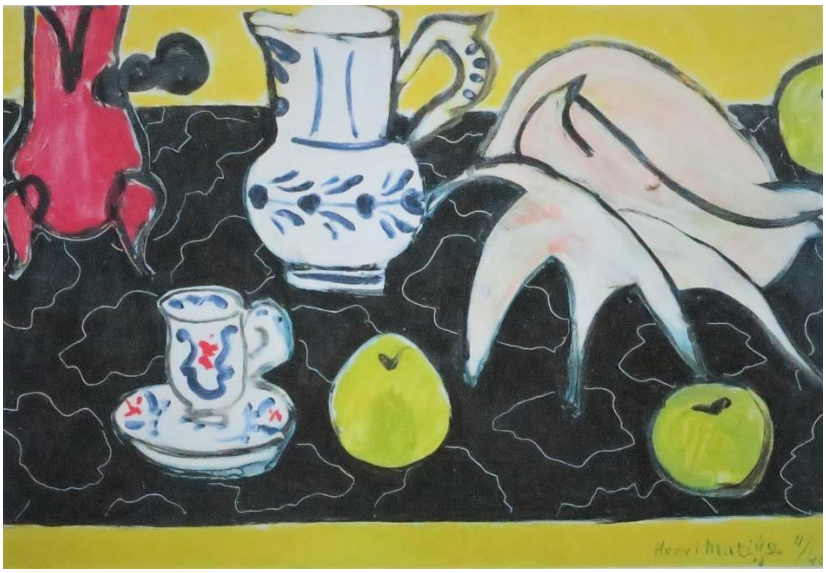
3.青い胴着の女 1935 年 アーティゾン美術館

1954 年 11 月 3 日にニースのシミエのアトリエでマティスの死をマグリットと看取った後、15 年前から荷造りしてあったスーツケースを持って家を出た。その後の記述はロシア・ビヨンドの記事から引用する。
第二次世界大戦後すぐ、リディアはフランス駐在のソ連の外交代表部と連絡を取り、マティスからのプレゼントや自分で買取ったマティス作品を祖国の美術館に寄贈するタイミングを考慮していた。1958 年に油彩画(下図 6,7)を含む 9 作品を寄贈した。下図 6 はプーシキン美術館に展示されていた。カタログ本にもリディアが寄贈した重要な作品であると記述されている。その後、リディアは 30 年間にわたり約 300 点のマティスのドローイングなどをエルミタージュやプーシキン美術館に寄贈した。彼女はソ連の著名な作家の K.パウストフスキー(1892~1968)とパリで知り合い、彼の作品の翻訳や通訳で生活費としていた。彼の招待状でソ連を訪問することもできた。リディアはパリで自分の墓地を買い、1998 年に自ら命を絶ち波瀾万丈の生涯を閉じた。



5. ボルティモア美術館 2010-11-19

4. 大きな横たわる裸婦 1935 ボルティモア美術館(コーンコレクション)、伊勢丹美術館(1996-10-3～12-28)



6. 黒い大理石の上の貝殻のある静物 1940 プーシキン美術館
(1958 年にリディア・ディレクトルスカヤが寄贈)
この絵の制作過程についてリディアが 1996 年の美術誌に記述
(「マティス展」 2004-9-10~12-12 国立西洋美術館 カタログ)

7. リディア・ディレクトルスカヤ 二色の肖像
1947 年 エルミタージュ美術館 リディア寄贈